

キツネとぶどうの房

日原 肇

子供の頃に読んだ、イソップ物語の中のキツネは、小利口だった。次の話のように。

一匹のキツネが、今が食べ頃とばかりに熟したブドウの房を見つけた。キツネは、ブドウがなっている高い枝に、何回も何回も飛びついたが、どうしても取れない。ブドウが食べられない、とわかると、キツネは、「あのブドウはすっぱいんだ。すっぱいブドウなんか食べたくもないさ。」と、いまいましてに言い捨てて、その場を去った。

このイソップのキツネのように、自分のできなかったことを認めないで、自分に都合のいい理由をつけて納得してしまうことを心理学では、「合理化作用」という。

この合理化作用を、現代の若者は、フルに活用する。障害となりそうな、困難なテーマにぶつかると、できるだけ巧妙に、それを避けて通ろうとする。どうしてもやらざるを得なくなった場合には、失敗の言い訳をあらかじめ用意しておく。小利口なので、その危険や困難を見通せるのである。そして、要領よく、スマートに生きようとし、不器用を「醜態」として嫌う。

不器用が醜態なら、何かを探し求めて行動すること、即ち探検も醜態となる。しかし、ダボハゼのように、身分不相応の問題にとびつき、それをやり遂げようと、眠る時間を削り、肉体を痛めつけながら、糸口を見つけるべく七転八倒するのが醜態だろうか。やっていることが、バカげたことに思えても、それを全力で打ち込む姿勢には、感動を覚えるはずだ。

不器用を醜態と片付けるのは、情熱をかける対象のない者、困難に耐えられない者の合理化作用である。まわりを見回しても、イソップのキツネの何と多いことか……。

彼らは、「不器用」同様に、「探検」もいやがり、探検に定義をつける。「探検とは、文明かつ都市が苦手な、体力だけの夢想家が、ジャングル、砂漠などの人のいない所に逃避すること。」

しかし、探検は、そんな消極的で夢みたくないものではない。探検の第一の目的は、何かを探すことである。だから、徹底的な慎重さで計画を立て、できる限りの資料を集め、また、考えられるだけの危険を想定し、それに対処できるようにせねばならない。ロマンチストは、その前にリアリストなのである。

また、探検家が、現代文明がどんな状況におかれ、何を必要としているのか、とらえるセンスがないと、探検の目的はあいまいになる。探検とは地球上で人の心が失ってしまった、探すに足るものを一つ一つ見つけていくことだ。

別にジャングルや、砂漠や、極地だけが相手ではない。大学の中でも、町の中でも、自分の頭の中でも、秘境・フィールドはある。いくつになっても、どこに住んでいても探検はできる。要は、眠っては何もできない、ということだ。

イソップのキツネは、ブドウの房を取ることを、諦めてはいけないのである。 (25代)